



TITLE:

[23-2] 『東南アジア研究』 23巻3号
(DD特集号) から

AUTHOR(S):

林, 行夫; 福井, 捷朗

CITATION:

林, 行夫 ...[et al]. [23-2] 『東南アジア研究』 23巻3号 (DD特集号) から.
DDニューズレター 1985, 23: 9-35

ISSUE DATE:

1985-09-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/236267>

RIGHT:

A : 「開拓村 (ウドンタニ県北モー村) 訪問記」

林 行夫

I はじめに

この報告は、ドンデーン村出身者が移住した開拓村のひとつを訪問した際にえられた口述資料を整理したものである。(注1) 東北タイにおける農民の集団移住は、一般に「ハーナーディー()」とよばれる。字句どおりに訳せば、「よい田を求める」となる。ドンデーン村自体も、このような移住者によって成立したことが知られている。ハーナーディー全般については改めて論ずることとし、ここではえられた口述資料を提示し、多少の考察をつけ加えるにとどめる。

訪問した村は、北モー村と称し、ウドンタニ県の西南部に位置する。訪問は、1983年10月と1984年12月および1985年1月の3度にわたり、それぞれ数日間滞在した。われわれの知りえたドンデーン村からの移住は、コンケン県西部とウドンタニ県の西南部に集中している(注2) [図参照]。いずれも、ドンデーン村からみれば西北の方向にあたる。ドンデーン村を形成した移住民は、東南にあたるローイエット、マハーサラカム両県出身者である。したがって、ドンデーン村から北モー村への移住も、ほぼ東南から西北へという大きな移住方向の波の一部をなすと考えられる。

タイ社会一般の伝統として、未墾地を拓き数年間耕作をつづければ、その土地に対する権利が生ずるとされる。このような意味における開拓は、「チャップチョング」とよばれる。のちにみるように、実際に開墾されるより広い範囲の土地の、周辺沿いの木の枝を一定方向にきり倒したり、印をつけるなどしてチャップチョングと称し、自分の権利のおよぶ範囲とすることが行われている。しかし、無制限に範囲を広げることが許されるわけではない。

ドンデーン村の成立当時(およそ120年前)の移住民たちは、自らチャップチョングしたようである。しかし、知りえた限りのドンデーン村からの移出者による開拓は、未墾地、既墾地の購入、すなわちすでにチャップチョングされた土地の購入がほとんどである。つまり、かつてはハーナーディーとチャップチョングは当然のごとく不可分であったが、少なくともドンデーン村からハーナーディー

に赴いた者にとってはそうでない場合が多い。

II. 北モー村における口述記録

II-1 北モー村の位置

北モー村（ウドン県シーブルアング郡ノムオング区）は、外界とふたつのルートでむすばれている。ひとつは、県庁所在地であるウドン市から210号線を西ヘナークラング郡の方向へ約80キロメートルゆき、道路沿いのコーコー村で南へ悪路をたどる。この悪路を約30キロメートルゆくと村につく。もうひとつのルートは、村の南東約25キロメートルの郡庁所在地シーブンルアング（当地の人々はタイラーオ方言でシーブンリアングとよぶ）を経るものである。北モー村との距離は25キロメートルにすぎないが、1日1便のミニバスで約2時間半もかかる。その悪路のため、片道10バツの運賃は安く感じる。シーブンルアングは、村の人々にとって市場がある場所であり、コンケン方面とウドン方面を南北にむすぶ交通路の中継点である。

成立して35-37年（1984年調査時）になる北モー村には、まだ電気はない。村の戸数は、区長でさえも「290戸近くになった。」と正確な数字を口ごもるほど、増加の途にある。しかし、村内を横ぎる道は広く、屋敷地は十分に余裕があり、村空間としての奥行はドンデー村とは比較にならないほどゆったりしている。開拓されつつある新しい村という印象が強い。

北モー村は、開村当初はわずか15戸の小村であった。村の創始者は、ルーイ県方面の出身を意味する「チュアサーイ・ルーイ」を自称する人々であったが、のちにハーナーディーで流入したコンケン、ローイエット県などからのタイラーオ族が多数を占めるようになった。先住者の^{タイ}チュアサイ・ルーイに対して、彼らは自らを「タイ・タイ」（南側からのタイ人）よんでいる。移住者の数においても、ふたつの異なる言語集団が交錯したという点でも、北モー村は「開拓最前線」ある。

II-2 北モー村の成立経過

北モー村の初代村長をつとめたヨート・スックチャイ氏（1917年生まれ）は、現在の北モー村から南へ7キロメートル下った隣のヤングロー区にあるヤングロー村で生まれた。ヤングロー村を1830年ごろに拓いた人々は、ルーイ県ワンサプング郡の出身者や「コンムアングナムパート」（注3）とよばれる人々であり、中央タイ語とも

タイラーオ語とも異なるルーイ方言を常用語とした。

ヨート氏は24才のとき(1942年)、ヤングロー村からノイ村へ移る。ノイ村は、ヤングロー村出身者が拓いた6戸ばかりの村であった。今日の北モー村の前身となった村なので、旧モー村(バーンモーカオ)ともいわれている。ヨート氏は1944年にこの村の村長となった。さらに翌1949年、ノイ村の6世帯、ヤングロー村からの5世帯、およびクットサティアン村(現在の北モー村より南東10キロメートルに位置する)からの3世帯、そしてシーサケート県からの移住者1世帯を合わせた計15世帯が、ほぼ時を同じくして現在の北モー村の場所へ移った。理由は、ノイ村の屋敷地が狭く、通行路が悪かったためという。この15世帯が北モー村の礎となり、ヨート氏がつづけて村長をつとめた。ヨート氏はその後を語る。

「北モー村へ移って3年もたたぬうちに、コンケン、ローイエット県からの人々が移住しはじめた。土地を買うためのハーナーディーだった。われらが開墾した水田をまず2、3人でみにやってきて、そのときに口約束で買いつける。そして、しばらくしてから金をもって家族と一緒にやってきたものだった。われらは1ライあたりでは売らず、70-80ライほどの単位で売った。当初、多い者で100ライくらいだった。土地によって2,000から3,000バーツ、最高5,000バーツくらいで譲ったように憶えている。彼らの屋敷地については無料で、耕地以外から金をとることはなかった」。

北モー村開村以来の歴史をよく知るもうひとりの村人は、エート・セクスワン氏(1926年生まれ)である。ヨート氏と異なって、チャイヤブム県チャットラート郡バーンタン区のファサートの村の出身者である。エート氏は、ハーナーディーにでた父親とともに、ヤングロー村のそばのドクリエット村に移住した。1939年のことである。数年後、「レン・サオ」(「娘と遊ぶ」の意。若い男たちが配偶者を求めて同村内、近隣村の娘たちを訪れる慣行のこと)にでかけたノイ村で現在の妻と知り合い1946年に結婚してノイ村へ婚入した。そして第1子をえた翌年に、家族全員で新たに北モー村へ移ったという。(注4)

「それから3年ほどしてから(1950年ごろ)、まず、コンケン県ナンボン郡ブアヤイ区のタールア村から2、3人、ローイエット県からも四つ、五つのグループがわれわれの水田をみにやってきた。次いで、ドンデーン村の人々もやってきた。しかし、これらの人々を知るようになったのは、のちになって売買関係を通じてであった

。.....(自分がノイ村に移ったころ)チュアサーイ・ルーイの人々の両親は、すでに一帯をチャップチョングしており、よそ者から土地を買ったことはない。ヤングロー村の水田面積は少なく、村の人々は、少しずつの米をもってきてノイ村と北モー村の間を往復しながら、耕地と村を確保(チャップワイ)していた。でも、水田を大規模に開墾するということではなく、ほとんど森林のままでおかれ、チュアサーイ・ルーイの人々は狩猟を主にしていたようだった。.....ハーナーディーでやってきた人々は、当時のヨート村長やブン氏をたよっていた。もともとの住人である彼らは、自らつくった水田は売らず、チャップチョングしておいた森林の外縁の土地を、やってきた人々に売っていた。移住者たちは当初、ナーコーク(陸田)としてこれを耕し、さらにあとからきたハーナーディーの人々に売って、ナークラング郡やチュムペー方面へさらに移っていったものだ。

エート氏によると、北モー村に寺院が建立された1957年ごろには、もとの先住者よりも、他県から次々と移住した人々の数が上まわったという。ルーイ県出身のある先住者は、土地を移住者たちに徐々に売却したのちに、チュムペー郡フェイソー村方面へでている。すなわち、成立して10年もたたぬうちに北モー村は耕地を求める他県出身者によって膨張した。

11-3 ハーナーディー移住者たち(1)

現在北モー村に住むドンデーン村出身者は26戸(1983年調査時)である。最初の人々は1950年前後に北モー村に移住している。最後の移住者グループが入村したのは1973年ごろである。また、1981年に水田だけを購入した者がいる。以下では、ドンデーン村からの最も初期の開拓者に焦点をあてる。彼らがドンデーン村をでたのは1940年前後のことであり、その時期は、ドンデーン村から多くの人々がハーナーディーのために他村へでた時期ともいわれている。

チャンディー兄弟の北モー村への移住経過

北モー村に移住した最初のドンデーン村出身者は、チャンディー兄弟たちである。彼らがハーナーディーのためにドンデーン村を離れたのは、早くとも1942年ごろである。そして、当初の目的地は北モー村ではなく、現在のナンボング湖北に位置するコークパクング村(ウドン県ノンサング郡)であった(図)。

チャンディー兄弟の両親は、ともにローイエット県出身で、ドンデーン村を開拓した世代に属する。両親はローイエット県から15日

の道のりを歩いてドンデーン村に至り、耕地をチャップチョングしたといわれる。そして、ドンデーン村で男子6、女子1の計7人の子供をもうけた。父親はその後、ドンデーン村で死亡している。長男から順に記しておこう。

- 1 チャンディー・シードンヤング(以下同姓): [男]
- 2 サーリ: [男]
- 3 トングミー: [男]
- 4 カイ (兄): [男]
- 5 カイ (弟): [男]
- 6 ファット: [女]
- 7 ブンミー: [男] 生後すぐに死亡

ドンデーン村では、両親はトゥングボーに水田を約30ライもっていた。収量は年間200-300 プング5)(2,400-3,600キログラム)だったが、200 プング以上を消費した。豊作年には余剰米は売らず、自給用としてカチャー(カゴ)に入れて保管していた。チャンディー氏(1914年生まれ)は次のように1940年ごろのドンデーン村を回想する。

「他の豊かな村人は、余った米を隣市タープラの中国人に1ハーブ(45.4キログラム)あたり25サタンで売り、その金で1着2-5サタンの服をタープラで買っていたものだ。両親の水田は洪水の被害を受けやすく、しかも塩がでる水田でもあった。米はいつも不足がちだった。これがハーナーディーに赴いた理由だった」。

チャンディー氏は、母親および兄弟6人とともにドンデーン村をでる。1942-1943年ごろである。一行には、牛車2台、牛4頭に加え、親類でもあるノンヤープレーク村のチャン・セーグ・ケーオ氏が含まれていた。そして、以下のコースでドンデーン村を北上する(名称は村名)。

- 第1日: ドンデーン→ドンハン→ノングコイ→ノングカイヌン(タープラ近く)→クットクワング→ノンサアート[泊]
- 第2日: バンペット→トゥム→クットサイウォー[泊]
- 第3日: ヒンラート→フェイヤング→コークスム→ポーノックカオ[泊]
- 第4日: ポング川をわたってウドン県へ入る→ノングタナー→コークパクング着。

コークパクング村には、すでにドンデーン村よりの移入者がいた。後述するチャン氏が、チャンディーたちより4、5年早く訪れていたように、この村は、当時、ハーナーディーでドンデーン村を離れた人々にとって当面の目的地とされた開拓村だったことがうかがえる。チャンディー兄弟のうち、カイ（兄）、カイ（弟）とファットの3人はコークパクング村で6、7年間すごす。チャンディー氏ほか3人は9、10年をすごすが、彼らはいずれもこの村に在住した間、年に何度もドンデーン村へ帰っている。知人や友人に会うためである。

コークパクング村でも米の収量は不足気味であった。カイ（兄）はここへ移った翌年に結婚し、妻の両親がもつ水田15ライを義兄弟とともに共同耕作した。しかし、義兄弟の人数7人と多く、水田は分与（ベングハイ）されなかった。そのようなところへ「北モー村によい耕地がある」という情報がもたらされた。ハーナーディーでドンクリエット村へきていたレー氏（ドンデーン村出身。チャンディー氏らのイトコにあたる）がコークパクング村のチャンディー兄弟を訪れた時のことである。そして、まずカイ（兄）夫婦とふたりの子供、カイ（弟）夫婦、それにファット夫婦の3世帯が3台の牛車を駆って、次の地点経由して北モー村へむかった。

第1日：ノムアング村〔泊〕

第2日：ドンポー村〔泊〕

第3日：ノンブロンチェング村（シーブシルアング郡）〔泊〕

そして4日目に北モー村に到着する（推定1949-1950年）。カイ（兄）氏の経緯をたどろう。

「北モー村の周囲はほとんど森林であったが、15軒のルーイ県出身者の家屋がすでにあった。（注6）先住者たちがここへきたのは4年前ということだった。」

カイ（兄）氏は、コークパクング村でたときには600バーツの所持金をもつばかりであった。北モー村へ移った初年度、彼は土地を買わず、先住者であるルーイ県出身ミー氏の水田（ドンクリエット村近くにあった）を耕作（ラップチャムーング）することで米をえた。300ブングの収穫は、水田所有者のミー氏に140ブング、自らに160ブングの割合で分配された。

翌年、先住者のひとりから1,000バーツで約20ライの土地を購入

する。内訳は水田1 ライ、森林19ライである。この年の収量は70ブングであった。足らなかったのを、当時のヨート村長が所有する水田を1 ライにつき15パーツで耕作し、村内で飯米を購入した。当時の相場は10ブングがあたり3 パーツである。

3年目には田圃を6 ライに拡張し、250 ブング以上の収穫があった。さらに4 年目は10ライほどに広げて500 ブング以上の収量をえている。そして、6 年目にルーイ県出身者のヌー氏より新たに20ライの水田を10,000パーツで購入した。7 年目、カイ(兄)氏はドンデーン村へ戻ったときにケナフとトウガラシの種をえて、北モー村にもち帰り栽培をはじめた。ケナフは1 ライほど植えたところ約1,000 キログラムとれ、シーブンルアングの市場で売り、250 パーツをえたという。当時の売値はキログラムあたり25サタンである。また、トウガラシでも100 パーツ以上の収入があった。さらに、サトウキビをも栽培しはじめたのは約9 年目で、サトウ汁をとり、厚み3 センチくらいの筒状の固形にしたものを1 個1 パーツで売っている。最初に600 個つくり、シーブンルアングで完売した。近年(1974 年)に至り、やはり先住者であるウアン氏から畑30ライを10,000パーツで購入する。そして昨年(1984 年)、カイ(兄)はサトウキビ栽培をやめてキャサバにきりかえ、今日に至っている。

長男のチャンディー氏は弟たちに遅れること約3 年、すなわちコークパクング村で9 年余りをすごしたのち、北モー村へ入っている(推定1953年ごろ)。「自分(チャンディー)がやってきたとき、北モー村は約40戸ほどの小村で、ルーイ県出身者が多く、言葉がわかりにくかったのを覚えている。弟をはじめとするドンデーン村、ノンヤーブレーク村、ナンポングなどコンケン県からの人々のほか、ローイエット、マハーサラカム県よりの人々が徐々に住みはじめていたところだった。彼らはルーイ県出身の先住者たちと区別して、自ら『南側からきたタイ人』(タイ・タイ)とよんでいた」。

チャンディー氏は、まず1 年目にヤングロー出身者のブンシー氏から50-60 ライの森林を3,000 パーツで購入する。そこにつくった田圃(ナーコーク)で陸稲を収穫した。

「森には象がいた。そこは悪霊(ピー)やマラリアに満ちたところだった。先にきていた弟たち、とくにカイ(兄)、カイ(弟)の2 世帯と共同し、初年度は120 ブングの前収穫を40ブングずつ3 等分した。『ヘットナムカン・キンナムカン』(共働・共食)だっ

た。2、3年目になると陸稲で700ブングほど収穫できるようになった」。

陸稲は早魃に弱かったという。水田を手に入れたがっていたチャンディー氏は、1970年代の中ごろになってようやく念願の水田30ライを14,000バーツで購入する。そして、1977年に「ノーソーサム」7)を他の人々に先じてとりつけたという。現在は自らの屋敷地内にウルチ米用とモチ用のふたつの米倉をもち、年間平均1,100-1,200ブングの収量をえている。必要に応じて、モチ米は1ブングあたり21-22バーツ、ウルチ米は米は1ブングあたり31-32バーツで、村内やシーブンルアングで売ることもある。農繁期には、村内に住むふたりの息子に手伝わせて年間70-80ブングの米を与えている。

チャンディー兄弟たちは、若干の時間の差はあるにせよ、全員がドンデーン村^もでコークパクング村で止住したのちに北モー村へ移住している。だが、今日も北モー村にとどまっているのは、チャンディー氏、カイ(兄)氏、カイ(弟)氏の3兄弟のみである。カイ(兄)氏とともに先陣をきって移住した妹ファットは、北モー村に入ってもまもなくノムワングヤイ村(北モー村の北西約12.5キロメートルに位置する)によい条件の土地をみつけたので、その後北モー村をあとにしている。さらに、後発隊としてチャンディーとともにやってきたサーリ氏とトングミー氏は、初年度の収穫が陸稲で200-300ブングはあったが、さらにハーナーディーでファイヒン(北モー村から北西5キロメートルの村)へ移り今日に至っている。北モー村を離れたといってもいずれも近隣村で、互いの連絡は容易な距離にある。現在、兄弟たちがドンデーン村へ戻ることはほとんどない。カイ(弟)氏はいう。

「かつては、友人や知人がドンデーン村にいたので、少なくとも年に1度は帰ったものだが、皆、でてしまい、誰もいなくなったので、ドンデーン村をなつかしく思うことはないよ」。

チャン・ケオデーング氏の北モー村への移住経過

チャン・ケオデーング氏(1918年生まれ)は、先のチャンディー氏よりさらに遅れて1957年にハーナーディーで北モー村へ移住した。だが、チャン氏が両親、兄弟とともにドンデーン村を離れたのは1938年のことであり、チャンディー兄弟たちより一足早くコークパクング村に移住している。そして、ここに19年間滞在した。

「ドンデーン村にいたとき、両親は20ライの水田をもっており、年に300-400 プングの収穫があった。しかし、悪い水田で飯米は不足がちだった。村をでるときに両親は水田、家屋、何頭かの水牛を売ってから牛車を購入した。.....コークパクング村へゆくことは決っていた。同村出身者（コンルオムバーンカン）のイン氏が連絡をとっていたからだ。われらは兄弟7人、両親2人の計9人、さらにドンデーン村の知人だったノイ氏とその妻で、牛車5台のグループだった。ほかに（チャン氏自身の）母方の親族（クルア・ヤート）が7、8人コークパクング村まで同行し、見送ったあとでドンデーン村へ帰った」。

その行程は3日であった。1泊目はドンボー村（コンケン県ムアング郡）、2泊目はタナー村（ウドン県ムアング郡）ですごし、3日目にコークパクグ村に到着したという。

到着後、両親は30ライの土地（ナーパー）を買い、500 プング（初年度）から800 プング（3,4年目）の安定した米の収量があった。9年目の1946年に、チャン氏は、同村にハーナーディーで移住していたウボン県ファヤート郡出身の娘と結婚する。同年、オークヒエン⁸⁾してから妻の両親の田圃を耕作し、年間300 プング以上をえていた。⁹⁾だが、以後10年の間に子供が5人（男3,女2）が生まれ、飯米が不足気味となり、よそによい水田を見つける必要が生じたという。

「コークパクン~~グ~~グ村をでて先に北モー村へいていたカイ（兄）たちが『誘い人』（コンサクチュオング）で、北モー村へゆくことをすすめてくれた。そこで1957年、わしの家族7人は、ドンハン村からハーナーディーきていたミー・ソッターじいさんとパーばあさんの家族7人の計14人で、牛車7台（うち5台はチャン氏のもの）で移動した。コークパクング村をでるとき、水牛と牛以外はすべて売り、約7,000 パーツの金をつくった。」

北モー村にはチャン氏の姉が先行しており、¹⁰⁾ 30ライほどの土地をもっていた。姉は、牛車1台と牛2頭でその土地を先住者から入手し、約10ライを水田にしていた。チャン氏は北モー村に入ればしばらくの間、カイ（兄）氏の家に（無料で）とどまるが、結局、ドンクリエット村近くにあったその姉の土地すべてを7,000 パーツで購入する。

「1年目は170 プングの米がとれたが、¹¹⁾ とても足らなかった

た。わしは他人の水田を耕作しないで、魚4尾と米1カゴ(約2キログラム)を村内で交換するなどして米をえた。ほかにはキログラムあたり3パーツだったケナフを植え、100キロはとった。自給用にウリ、赤タマネギ、タバコやトウガラシなどもつくった。」

2年目、チャン氏は水田を約15ライに拡大して300ブング以上をえる。6年目を迎えるころには水田は22ライほどになり、収量も600-700ブングに増加した。12年目にはほぼ現在の規模になり、通常800-1,200ブングの収量がある。ちなみに1983年は1,100ブングがとれ、雨が不足がちだった1984年は700ブングであった。収量が増加するのと同時に、チャン氏はさらに5人の子供をもうけている。

まだドンデーン村に親類や知人をもつチャン氏は、2年に1度はカチナ衣奉献祭(ブン・カチン)や供養飯儀礼(ブン・チェークカオ)の際にドンデーン村に戻るといふ。しかし、彼自身の兄姉は、以下に示すように、全員がコークパング村を経てのちにさらにハーナーディーで他村へ移住している。

- 1 ブン(長姉): ドンデーン村→コークパング村[住]→ノングカム村(チュムペー郡)に移住後死亡
- 2 ルン(長兄): ドンデーン村→コークパング村[住]→クットディンチー村(ウドン県ナークラング郡)に在住
- 3 ロート(次姉): ドンデーン村→コークパング村[住]→クットディンチーに移住後死亡
- 4 ノイ(三姉): ドンデーン村→コークパング村[住]→北モー村[住]→コークパング在住
- 5 チャン氏(インフォーマント): 省略
- 6 ワン(妹): ドンデーン村→コークパング村に在住
- 7 パン(弟): ドンデーン→コークパング村に移住後死亡

II-4 ハーナーディーの移住者たち(2)

ハーナーディーによる「新天地」での暮らしむきは、開拓者としてどのようなかたちで耕地をものにするかで大きく左右される。北モー村開村初期のころに着目すれば、当事者の境遇と能力が、可能性に満ちた生活の確立にとって、いかに大きな要因であったかが明確である。ドンデーン村出身者ではないが、以下に述べる移住者の今日に至る経緯はこのことを示す端的な例である。すなわち、現在の北モー村の有力者とされているエート・セクスワン氏とティン・ソムパッディ氏の場合である。

エート氏は先にもふれたように、ドンデーン村出身者からみれば北モー村の先住者になるが、彼自身もハーナーディーの過程で北モー村に移住した立場にある。そして、のちに村長をつとめた経験のもち主である。一方のティン氏は、チャンディー氏とほぼ時期を同じくして北モー村入りしたコンケン県出身者である。現在の北モー村の宗教的リーダーでもあるが、まさに北モー村で多数派となったハーナーディーの移入者たちによって選ばれ、支えられている人物である。

エート・セクスワン氏の移住経過

エート氏の両親は、チャイヤブム県チャットラーム郡のファサート村に20ライの水田をもっていた。平年で150 プングほど、豊作年では200 プングほどの米が収穫できたが、「砂状の土壌で質がよくなく、ひんぱんに旱魃にみまわれた」水田であった。エート氏が13歳の(1939年)、両親は同村内の8世帯とともにウドン県のドンクリエット村へハーナーディーにでた。この村へは、父親の兄弟が先にチャップチョングシにいており、連絡されたためである。両親は、エート氏を含む子供8人全員で離村した。そのときに水田を400-500 バーツでファサート村の知人に売却している。

9世帯がドンクリエット村に入ってからしばらくして、ファサート村方面に雨が降ったという知らせが届いた。この知らせで、一緒にやってきた8世帯は全員チャイヤブム県の方へ引き返したが、エート氏の家族は残り、兄弟とともにチャップチョングシはじめた。約50ライの森林部を確保したが、すぐには耕作できなかった。初年度とその翌年は、当時ドンクリエット村の住民だったケンター氏(ルーイ県ワンサブング郡出身)の水田を、ひとりあたり年間100 プングの粳米という条件で耕作した。兄弟ひとりずつがそれぞれに行なった。

3、4年目には自分たちの土地で15ライほどの水田耕作ができるようになり、約200 プングが収穫できた。7年目(1946年)、20歳になったエート氏は、ヤングロー村出身の娘ソムシーと結婚するためにノイ村(旧北モー村。1942年開村)へ婚入する。エート氏の両親は、以後もドンクリエット村に住んだ。妻の両親が自らチャップチョングシして拓いた水田60ライはよい水田で、年間1,000 プングの収量があった。結婚の翌年に第1子をもうける。この年、屋敷地を現在の北モー村に移し、妻の両親とともに全員が住んだ。エート氏は以後7人の子供をもうけ、妻の両親の老後を世話した。現在は、

同居していたその両親も亡くなり、よい水田はすべて彼が管理している。

エート氏は北モー村に移住して約12年後、はじめてチャイヤプム県の出生村へ様子うかがいによっている。「誰も知人がおらず、『どこからきたのか』と尋ねられた」。彼が生まれ故郷へ戻ったのは、あとにも先にもこの1回のみである。

ティン・ソムバディ氏の移住経過

1915年にナンボン郡のブアヤイ区でまれたティン氏は、同区内にあるタードゥア村で現在の妻と結婚、6人の子供（うち2人は死亡）をもうけた。10ライの水田をもち、年間約400ブングの米を自給用としてえていたが、洪水がひんぱんにあり、よい水田が欲しかったという。タードゥア村出身の義姉の息子が北モー村にハーナーディーででていた（1959年）ので、ティン氏はまずひとりで水田をみるために北モー村を訪れた。そして、帰村後すぐに、いくばくかの畑と10ライの水田をタードゥア村の知人に計1,500バーツで売り、子供4人と妻とともに再び北モー村をめざした。1952年のことである。

「まず、到着したその日から、当時のヨート村長の家の裏側にあったスックという人の家と屋敷地を、180バーツで買って住んだ。2年早くきていた義姉の息子から森林20ライを500バーツで手に入れたが、最初の2年間はこれを水田にするのにかかり、米をつくらなかった。だから、ヨート村長が決めた条件（年間100ブングの粳米）で彼の水田を早朝から暗くなるまで耕作したよ。家族全員が十分に食べるのに200ブングは欲しかったんだが……」。

ティン氏自身の水田は3年目を迎えて耕作可能となる。森林20ライは5、6ライの森林と14、15ライの水田にかえられた。そして、この年は150ブングの収穫があった。12)

「当時、ハーナーディーで北モー村に移住した多くの人々は、先住者が確保していたいくらかの水田を買って、移住したその年から耕作したものだが、自分はそれほどの金銭的余裕がなかった。」。

翌4年目（1955年）には、同じ水田面積で、前年の倍である300ブングの収量があった。しかし、収穫後ティン氏は、水田を含めた計20ライのすべての土地を6,300バーツで売却する。相手は、コンケン県ノングルア郡のメング村から、ハーナーディーで北モー村に

やってきた人である。そして、ティン氏はすぐに平坦部の森林100ライ（うち10ライが水田化されていた）を3,400 パーツで手に入れた。

「この土地は村の『公共地』（ティーディン・サータラナ）だった。だから、わしがだした費用は、この年（1955 年）に着工されたばかりの寺院に、僧房（クティ）や講堂（サーラー）をつくる経費にあてられた」。新しい土地を耕作した翌年、200 プングの米がとれた。翌年、その次の年と、ティン氏は水田面積を徐々に拡大し、300 プング、400 プングの収量をえるようになる。

400 プングの米がとれたその年、水田は15ライ程度であった。そして、同年の収穫後、ハーナーディーで北モー村にやってきたばかりのコンケン県からの移住者に、そのすべての土地を15,000パーツで売りわたし、ティン氏は8,000 パーツで現在の42ライの土地（内訳は水田20ライ、森林22ライ）を手に入れた。1957年のことである。翌年には、この水田から600 プングの米が収穫された。以後、ティン氏は土地の売買はせずに今日に至っている。北モー村に移住後、さらに6 人の子供をもうけたので、ティン氏の家族は12人になっている。

「土地を売買する額は、知人、親族ほど安く、見知らぬ者に対してほど高くなる」とティン氏はいう。同じハーナーディーでやってきた彼の仲間たちは、よりよい条件の水田を入手するティン氏の土地ころがしの過程と今日の財をなした手腕を評して、「ティン氏は『農民博士』（チャオナー・エーク）だよ」といってはばからない。この一見、世俗的な現実家は、同時に北モー村の寺院設立以来の信仰熱心な篤信家（ターヨック）であり、自他とともに「法を守護する者」（プーラクサータンマ）にを認めている。また、北モー村には「村祠」（ラックバーン）があり、四斎日（ワンプラ）ごとにここへ献花・献灯するのも彼の大切な役割のひとつである。

II-5 「村の守護霊」信仰をめぐる先住者と移住者

先住者との土地の売買関係が成立して「よそ者」のハーナーディーによる移住は可能となる。たえず移住者の出入りがあるために同質性を欠く村の常態からすれば、両者の間には定住者と侵入者というかたちであらわれるほどの尖鋭な緊張関係は生じないのがふつうであろう。北モー村の場合、ふたつの異なる言語集団ということから、互いがチュアサーイ・ルーイとタイ・タイという分類をもって、先住者、移住者を明確に区別する傾向が長くつづいてい

る。しかし、これまで両者が対立する事件はなかったといわれている。

「（先住者の）ルーイ県からの人々は、われわれ『南側からのタイ人』に耕地を売って皆チュムペー方面へでていった」という移住者は少なくない。ルーイ県からの人々は売るために土地を占有・確保していたのだともいわれる。いずれにせよ、現在の北モー村では先住者たちは、すでにいなくなってしまった人々として語られる傾向が強い。今日、北モー村の住民はすべてがハーナーディーでやってきた「南側からのタイ人」であるという勢いである。

だが、実際には4世帯ほどの先住者グループが現在も在住するほか、自らをチュアサーイ・ルーイの系譜に位置づける人々も少なくない。このことは、ふたつのグループが互いにほとんど干渉せず、それぞれの生活領域を守りながら共存してきたことを思わせる。北モー村という一行政村のなかには、さらに分離できる社会的世界が展開しているといえよだろうか。それは、かつての「村の守護霊」（ピー・プーター）信仰をめぐる両者が多少異なった姿勢をもつことにもうかがわれる。ハーナーディーによる移住者にとって、先住者がすでに制度化していた「村の守護霊」の儀礼は、「（供物用の）酒やニワトリが高くつく」不合理なものであり、「村の守護霊」自体、病や災禍の元凶だったという。一方の先住者にとってそれは「村の規律、生活の規律」としての意味をもっていた。

北モー村初代村長をつとめたヨート氏（前述）も、チュアサーイ・ルーイを自認する人である。現在、下半身を失ったヨート氏は、家族の者以外に、常に5、6人のチュアサーイ・ルーイを自認する人々にかこまれて日々を送る。彼によれば、チャップチョングにともなう北モー村の成立と「村の守護霊」祠（ホー・プーター）の設立とは不可分のものである。

「恐しい悪霊がいる森を皆で分割し合う。互いに口約束でおおまかな広さに分けて、めだった大木にX印をつけてゆく。境界はもうけなかった。一定の範囲内の木々を伐採して森を切り拓いてゆく。木をきりだしてから火をつけて焼くんだが、木をきりだすと同時に、家屋づくりと「村の守護霊」祠づくりにかかる。これらをすませてから開田しはじめた。田圃の境界は雨が流れ落ちるような高みになるところじゃよ」。

ヨート氏を中心とする開村者たちは「沼」（レンナム）のそば

に水田をつくって水稲（カオナー）を植えた。のちのハーナーディーの移住者がするような陸稲（カオハイ）を植えることはなかった。水稲以外には、トウガラシ、トウモロコシ、ウリなどを栽培したという。

開村者たちは「村の守護霊」を崇めた。村内からくじで選出した儀礼執行者（チャム）をリーダーに、年2回の儀礼をとり行なった。陰歴2月には豚4頭とニワトリ4羽を、陰歴6月には豚8頭とニワトリ6羽を、それぞれ（水曜もしくは木曜日に祠に献上した。四斎日には、①精米しない、②耕作しない、③水牛・牛を使わない、④炭をつくらない、⑤生類を殺さない—などの規律を守り、仕事を休む日としていた。

「それらは村の『法律』（コットマーイ）のようなものだった。もし、犯す者がでると村の連中はすぐにチャムに知らせ、その人物を『村の守護霊』祠へつれてゆく。そして許しを乞う。そのときには酒とアヒルあるいはニワトリ1羽、米、そしてローソクのかわりになる「コヨリ」（ティエンカム）を用意する。彼が持参しなければ、チャムが用意して整え、許しを乞うたものだ」。

「村の守護霊」への儀礼は1971年にとりやめられる。「村の守護霊」を追放（カップライ）したためである。ヨート氏が回想する。

「ハーナーディーで他村からやってきた人々は（上記の）われわれの『きまり』（ウィナイ）を知ってはいたが、守らなかった。『きまり』に無関心で仕事をする者が多くふえてゆくにつれ、そのために悪霊の犠牲になる者がではじめた。（やがて）『きまり』を犯した当事者だけではなく、他の人々まで『村の守護霊』の怒りの災いを被るようになった。さらに、そのつど『村の守護霊』に許しを乞うことも困難になってきたので、人々は集会をもち、僧侶に相談することになった。結局、『村の守護霊』をおいだして今日の『村祠』を設立した」。

この「追放劇」にたち会い、全体的なアレンジを行なったのは、前述した移住者のひとりであるティン氏である。ティン氏は次のように述懐する。

「病やいろんな災難にあった人々がでた。原因は『守護霊』にあるといわれていたので、僧侶でありモータム（悪霊払い師）でもあったプラ・ブンマー師（ウドン県ノンサング郡のフェイクラチャイ村

に止住していた)のところへわしが赴き、きてもらうようにとりはからった。そして『村の守護霊』にうかがいをたててもらった。師は花とローソク各5対(カンハー)を用意して問うた(以下、師=僧侶;守=『村の守護霊』)。

師:「(守護霊に対して)ここにもう何年いるのか」

守:「100年になる」

師:「すかせた腹をいつもどこで満たすのか」

守:「いつもさがしている」

師:「新しく生まれかわりたいか」

守:「生まれかわりたい」

師:「なれば、(仏教の)戒律を遵守できるか」

守:「できない」

師:「できないのならば、なぜ生まれかわりたいのだ」

この問いに『村の守護霊』はこたえなかった。そこで師は追放を決め、儀礼(ピティ・カンバーン)をとり行なった。まず、土をもってきて一握りずつつかんで口もとへやる。呪文を込める(ブーク・セーク)ためだ。そして、この土を村の境界にまき放つ。次に、村の四方(東西南北)に木柱を1本ずつ埋め込んで土をかぶせた。『村祠』をつくったのはそのあとだ。

新しくたてられた「村祠」は、ラックバーン、アハックバーンなどとよばれているが、人によってはラック・ウパクット13)ともよぶように、そこには精霊ではなく仏教的な守護神が祀られているとされる。移住者の人々は、「われわれは、『精霊』ではなく『法』(タンマ)14)によって守護されている」という。開村以来の地域的守護霊は、より抽象的で一般的な仏教の守護力によってかわられた。15)

この「宗教改革」では、先住者との間にはまったくコンフリクトは生じなかったようである。当時、すでにルーイ県からの出身者たちが北モー村では少数派にすぎなかったことも一因であろう。だが、現在も同村に住む最住者であるヨート氏たちはいう。

「儀礼はしなくなったが、われわれ(チュアサーイ・ルーイを自認する者)は『村の守護霊』を祀っていたころの『きまり』を守りつづけている。このことは、ハーナーディーで移住した人々には強制するべきものではない。当人次第のことだから」。

開村当初から北モー村に住む人々からすれば、当時の生活規範は今日も規範でありつづける。ハーナーディーによる他村移入者があって約20年を経て、それは公の領域から私的な領域へと退いたのだが、その変化は、新しく北モー村を担う世代が成長する時間のうちにゆるやかに進行したとみるべきだろう。地域的信仰の差異は、国教としての仏教の枠内で解消されているのが北モー村の宗教生活の実状である。

III ハーナーディーをめぐる若干の考察

われわれがインタビューできたハーナーディーによるドンデーン村出身の移住者は、彼らより1世代以前の常態だったと推察されるチャップチョングではなく、すでに先住者がチャップチョングした土地の購入を通じて田圃を開拓し、自らの生活を築いている。それは北モー村に移住した者だけに限られることではない。

ウドン県ナークラング郡クットディンチー区ノンサノー村へ移住したケオ・ケオデーング姉妹とその両親たちの場合も、同様である。彼女の両親には5人の子供があった。ドンデーン村では年間200ブングの米がとれたが、十分ではなく、1955年にハーナーディーにでた。家族全員が他の村人とともに牛車10台以上の大部隊でドンデーン村を北上した。北モー村を通過してノンサノー村まで11日を要したという。やはり、当地にはすでにチャップチョングした有力者がいた。両親は100ライの森林を8,000バーツで購入したほか、空家だった現在の家と屋敷地を60バーツでえた。田圃を¹²開き、5、6年後には300ブング以上の収穫があり余裕がもてるようになったという。

一般に、年代が現在に近づくほどに入手する土地の購入費も高くなる。北モー村へ1973年ごろに移住したター・シーハヤック氏は、水田40ライを含む100ライの土地をドンクリエット村に住む所有者から29,000バーツで購入している。北モー村開村まもないころにやってきたター氏の従弟が27ライの水田を含む30ライの土地を300バーツでえたことと、ター氏はよく比較するのである。現在もドンデーン村に住むプアング・チャムナン氏が1981年に買った北モー村の水田32ライは、54,000バーツであった。耕作は北モー村に住むプアング氏の知人が行うが、農繁期になるとコンケン県での勤務先（東北地域農業センター）を休んで、子供や妻とともにドンデーン村からやってきている。

ハーナーディーは、いくつかの開拓村を中継するようなかたちで展開する。兄弟がいくつかの場所に分かれて止住し、連絡をとり合って、よりよい条件の地にさらに移動することは珍しいことではない。移住は必ずしも単線的な一方通行の行動ではない。むしろ、出生村と第1、第2の移住先との間をゆきつ戻りつ進行してゆくのがふつうである。すなわち、移住者にとっての開拓村は、当初からの定住地では必ずしもなく、中継地としての性格をもつ場合が多い。

すでにみたコークパキング村は、1940年代には、北モー村に止住することがなかった移住者にとっても、開拓村であると同時に、あたかも同郷者の「開拓中継村」のような役割を果たしていたようである。現在、コンケン県チュムペー郡のバーンパイカットヒン村に住むブアット・マイカミ氏は、1940年にハーナーディーで父親に率いられてドンデーン村を離れ、コークパキング村に移住した。父親はここを拠点にコンケン県チュムペー郡のノングワー村へ1カ月、さらに同郡内のノングトン村へ赴いて24ライの土地を260バーツで買いつけた。そして、次女の夫が先にここへ単独で入村し開墾する。そののち、次女をはじめとするファット氏の兄弟がコークパキング村を離れてノングトン村へ移住し、^{（1946年）}ファット氏自身は、行動をとるにせず、再婚で現在の村に婚入するのである。

インフォーマントが述べる移住理由は、田圃が洪水・旱魃の被害を受けやすかったり土壌が劣悪であたったりすることに加え、その相続状況や扶養家族の成員の相対的多数によって飯米が確保しにくいというものである。ハーナーディーは第1に、当事者が耕作する田圃の自然的・社会的条件が、そのとき、あるいは将来に備えての飯米確保に不安をもたらせているために、他村の田圃を検分したうえで移住することである。だからといって、ハーナーディーは、必ずしも離村を余儀なくされた貧民（コン・ヤークチョン）がとる社会的行動とはみなされていない。むしろ、より収量のよい耕地をえて暮らしむきを向上させる契機をもつ、積極的な行動として捉えられる傾向がある。このような行動は、先代からの移動・止住のパターンの延長線上にあるものである。出生村にとどまることそれ自体にさほど積極的な意義が認められていないことが背景となっている。

基本的に、ハーナーディーによる移住行動には、いくらかの物見遊山（パイ・ティオ）と、それにともなう情報が先行する。そして、自身による耕地の下見・検分行動がつづく。次いで、当地の先住

者（チャップチョングをした者）との買いつけ約束がすんでのちに、家族・きょうだい全員の移住が行われる。それは、決してあてどなくさまよう冒険的探索ではなく、きわめて計画的である。しかも、人々によって収集・交換される複数の情報が実際の行動に先行する点で、広範な社会的行動である。

ハーナーディーにみられる人々の移動性は、移住をともなわくても村人の生活の端々にうかがえる要素である。今日もドンデーン村に住む者もたえず村外へでていたといっても過言ではない。まず第1に、不安定な稲作の自然条件がもたらす、そのつどの飯米確保のために、人々は行動した。曜日ごとに行程の安全を願う儀礼行動があったことは、旧来から村内の人の動きが激しかったことを示している。ある古老（1911年生まれ）は、約50年前のドンデーン村の一光景を次のように回想する。

「昔も今と同じように洪水と旱魃はあった。そんなときには夫婦や兄弟ぐるみで牛車で米を求めて約15日かけてウドン方面へむかったものだ。そして米をえたらすぐに戻ってきた。人々は、それぞれにさがしまわる人からどこへゆくべきか聞く。米がなくなったらまたゆく。同じ年に何度もいった。洪水があれば、今のように外へ仕事をみつけて金をもうけ、それで米を買うんじゃなくて、米をさがしたんだ。そのような遠出の出発のとき、安全を祈って縁起をかついだよ。日曜は顔をきれいに洗う。月曜はまず横になってからでる。火・水曜は甘いもの（菓子）をひと口食べてから、木曜なら顔に白粉を塗って、金曜には少し村のなかを散歩してから牛車にのる。土曜には身内で少し痴話げんかをしてから牛車を寺院の方へむけてでるんじゃない」。16)

さらに、飯米を求める行動に加えて、タイラーオ族の男性にはさまざまなかたちでの一時離村的な行動が顕著である。よく知られる出稼ぎに限らず、「嫁さがし」（レン・サオ）や各地に散住する親族・知人間の「相互訪問」（マーマム・パイヤム）、さらには¹⁷⁾一度後にそうしたネットワークを通じて各地の寺院に止住する僧侶の巡歴行動などがある。その行動範囲は近郊から遠方の県とさまざまであり、そのまま訪問先に住むことも珍しくない。それらはいずれも「どこかへ旅する」（パイ・ティオ）という日常語で表現される、いくらか無目的な行動の延長にある。

離れた村に戻ることもあれば、そのまま嫁や職をえて他所に生活をもってしまうこの行動は、社会移動(social mobility)のひとつ

のチャンネルをなす面ももっている[Kirsch 1966: 370-378]。同時に、この行動の社会的結果として、出身村と到着地間を往来できるルートが生まれ、村外の情報を人々にもたらし回路が形成されることになる。すなわち、それは複数の村落を往来するような生活の移動形態を可能にする背景となる。

ハーナーディーは、基本的にはそのようなパイ・ティオ行動のルートに立脚していると考えられる。しかも、単なる旅ではなく、より具体的な目的をもった離村行動としてあらわれる。すなわち、それは離村と定着の連続的な過程のなかで進行する、ひとつの基本的な生活の構築・維持様式とみることができる。定住することはそのような生活様式の一局面としてあらわれる。ハーナーディーで移住したインフォーマントもその両親も、同じく移動の途にある人生であった。米の収量が安定しない「限界地」に自らの生活基盤をおく人々にとって、ハーナーディーとはよりよい収穫の手段としての耕地をゆきつ戻りつさがし求める(ティオ・ハー)基本的な生活行動を意味していると思われる。

すでにみたように、移住者たちの故郷意識は、場所としての村にあるよりは、きょうだい、親族、知人を主とする親密な人間関係にある。そして、ある者が移動することによって他の者もまた連鎖的に移動のチャンスを与える。そのような社会関係の流れのなかで生活が把握されるがゆえに、耕地としての田圃は、所有されるべきものというよりは、水牛や牛と同様に使用されるべき生活上の道具であったと解すべきであろう。17)

しかし、人口が飛躍的に増大し、未墾地が減少するばかりの現在、ハーナーディーは財力のない者には不可能な行動になると同時に、土地の所有価値も徐々に人々の生活に根づいている。田圃は「市場」世界の中に組み込まれた不動産としての価値を生じつつある。ハーナーディーにみられた人々の伝統的な生活行動様式は、現在、田圃ではなく金を与えるために地方都市、バンコクそして中近東へ広がる「ハーンガータム」(職を求めて)の出稼ぎ行動に収束したかのようにみえる。

参考文献

- 林 行夫、1984。「モータムと『呪術的仏教』：東北タイ・ドンデー村におけるクン・プラタム信仰を中心に」『アジア経済

Kirsch, A. Thomas. 1966. Developmental and Social Mobility among the Phu Thai of Northeast Thailand. Asian Survey 6 (7) :370-378.

1)「開拓村」にあたるタイラーオ方言はない。ここでは、記述・分析上の用語として使用する。なお、本報告で使用される資料は、基本的にはすべてインフォーマントの記憶をたどって再構成された個人史、村史である。開拓村としての成立を明確にするため、ドンデー村出身者のみならず、当村の創設者、他村からのとのインタビューを行なったが、ここにあげたものはその一部である。このような資料では、当然のことながらいくつかの矛盾があり、ある事実についての正確な年代の確定がきわめて困難である。しかし、多くの場合インフォーマントは自身におこったイベント（生まれ年、結婚、子供の誕生、移動の年など）をタイ農村に広く浸透している干支で記憶しているので、これを中心に査定した。また、共有される同一の事実については、立場の異なる人々にインタビューすることで、情報をより確かにすることに留意した。

2)インタビューを行なったコンケン県チュムペー郡内のバーンパイクットヒン村、ノングトン村およびウドン県ナークラング郡のノンサノー村のほか、ウドン県ノングブアランブー郡、ノンサアート郡方面が含まれる。

3)ルーイ県と県境をしたウタラディット県ナムパート郡の人々という意味と推察されるが、不詳。

4)エート氏の記憶では北モー村の成立年は1947年であり、ヨート氏のより2年早い。

5)1ブングは約12キログラム。ブングはムンとも発音されている。

6)カイ（兄）氏の述べる当時の戸数は、ヨート氏の口述と一致する。

7)土地が利用済みであることを確認する公的証書。

8)妻方の親と同居後、独立の家屋に住むこと。

9) 植えていた品種の呼称は、カオ・イセー（カオ・ニャイと同品種）、カオ・カオ、カオ・チャオクングである。

10) 姉は、ドンデーン村→コークパクング村→北モー村を経たのち、再びコークパクング村へ戻って住んでいる。

11) 品種の呼称は、カオ・ドークチャン、カオ・ニャイ、カオ・クラングである。

12) 品種の呼称は、カオ・カムパイ、カオ・パン（カオ・ドークチャンと同品種）である。

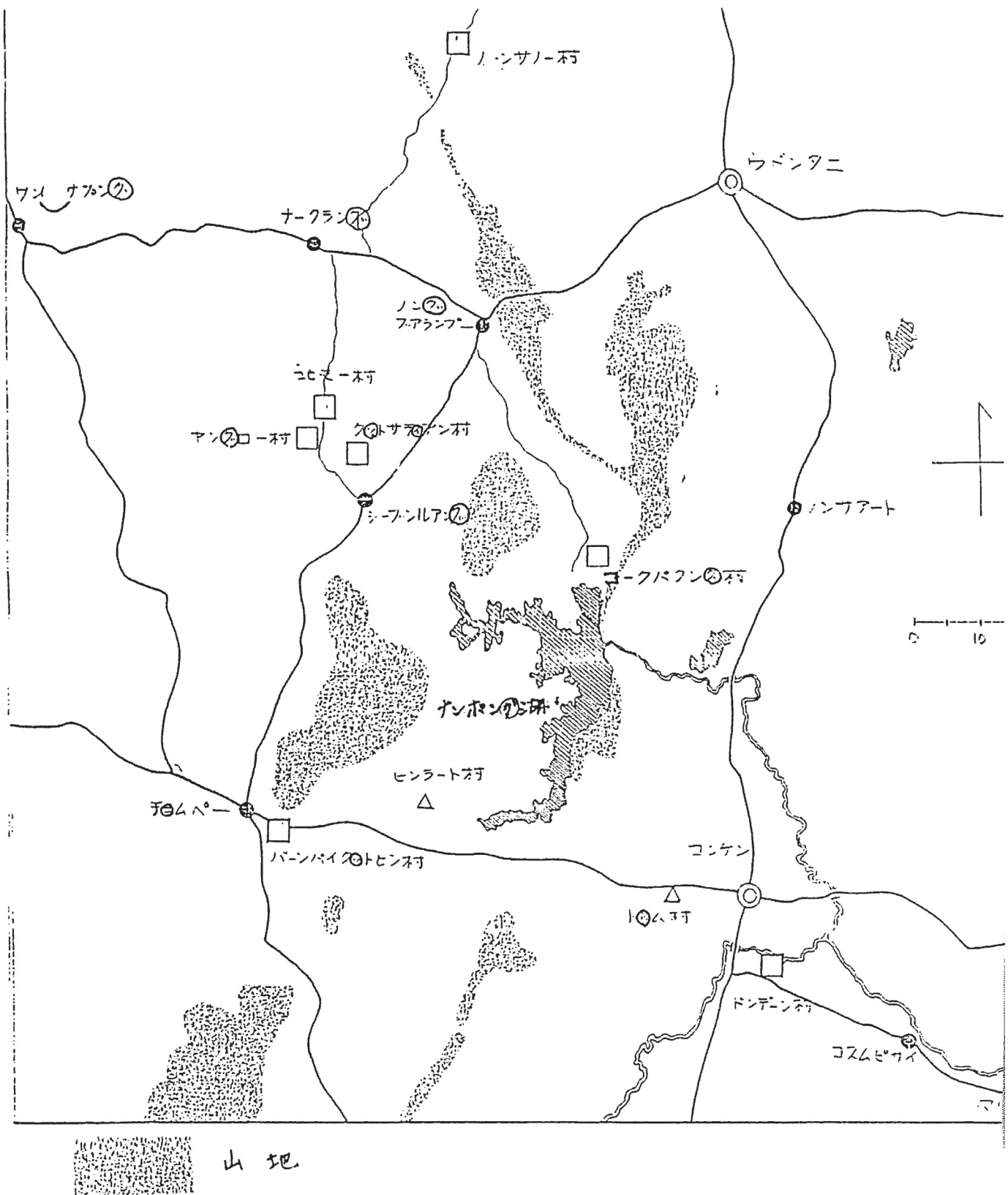
13) ウパクットは呪力をもつ僧侶と考えられている。

14) 文字どおりのダルマというよりは、聖なる力として言及される。これは東北タイ農村では一般的である。

15) このような「村守護霊」の悪霊化→追放→仏教的守護力の導入の過程は、同じ開拓村であるドンデーン村にもみられる。[林 1984: 77-98]。

16) 人々が赴いたのは、ウドン県、コンケン県チュムペー郡方面であったといわれるが、チュムペー行は行路が泥道になりやすく、牛車が通行困難であったため、ウドン行の方が好まれた。

17) 使用权の優越は人々の土地意識に根強い。本来誰にも所有されない村の公共地が、使用权をもとに村人の間で売買されるのはふつうである。



④ 開拓地の配置略図

福井 捷朗

この特集号は、タイ国東北部のドンデーン村を対象に行なわれた村落調査の結果の一部を紹介することを目的として編集された。調査は終了しているが、その結果のとりまとめにはなお相当の時間を要する。本号に取り上げた諸論文は、比較的分析が進んだ部分、資料的価値をもつものなどを中心としている。ドンデーン村調査の全体を偏りなく代表しているものでは必ずしもない。

この研究プロジェクトは、京都大学東南アジア研究センターの石井米雄教授を代表とし、主に文部省科学研究費補助金（海外学術調査）によって行なわれた。現地調査は、1981年度に7ヶ月間、1983年度には12ヶ月間行なわれた。調査者の数は、初年目が日本人16人、タイ人3人、二年目は同じく20人と2人であった。調査者個人をとれば、一年のみの参加者を除けば、各自が1ないし6ヶ月間の定着を2回経験したことになる。参加者の専門は、人類学、社会学、経済学、地理学、環境科学、それに農学の各分野にわたる。一村の調査にかくも多数かつ多岐にわたる研究者が関わったことについて、多少の説明を要すると思われる。

村落定着調査という研究方法が人類学者達によって認められるようになった背景には、村をひとつの全体としてみ、それを構成し、その中で互いに機能している諸要因を明らかにしようとする態度があった。このような見方によれば、総合的で、かつ、詳細な調査が必要になるが、それが必ずしも成功していないことは、人類学者達自身が認めるところである。その根本的な原因は、“one man, one village, one year”といわれる人類学的調査の一般にある。ドンデーン村調査においては、自然科学を含む学際的チームにより、1964年に水野浩一氏によって初めて調査されたと同じ村を再調査することによって、従来の調査方法の殻を打ち破ることを意図した。

一方、調査に参加した自然科学とくに農学関係者にとって、社会科学家と合同の村落定着という方法は、全くの冒険であった。なぜなら、このような試みは、実験的方法を主たる武器として発達してきた従来の農学研究を離れ、もっぱら実態調査に没頭することを意味するからである。単に社会科学に奉仕する以上に、農学というディシプリンにおいて十分な評価がえられるような仕事ができるかどうかは、まったく分からない。しかし、開発途上国の農業の諸問題

を考えると、実験室や試験場に閉じこもらずに、現場の農業を全体的、組織的に調査研究する必要性があると思われる。そのための方法論はないものの、村落定着というやり方によって、村落レベルでの農業を体系的に把握することに意義を認めた。

以上に述べた社会、自然科学双方のそれぞれの思惑は、村落レベルでの総合的、全体的調査という点で一致する。すなわち、いずれの分野に属する者も、専門に関わるある一面の理解だけには満足しないという了解を頼りに、本調査は実行に移されたのである。

学際的チームの定着は、人類学者ひとりが定着するのとは全く異なった光景を現出した。常時 10 人近くの異邦人が、5-6 人のラーオ系タイ人の若い大学生助手と共に、176 戸からなる村の中で、2-3 軒の農家を借り切ったり、間借りして、毎朝、毎晩、村人と顔を会わせて生活したのである。3 人の女中、4 人の常雇いインフォーマント兼助言者、それに季節的に必要であった 5-6 人の人夫は、すべて村内から雇った。近親者集団のことを村では「スム」と称するが、われわれのこの大集団は、「スム・ジープン（日本人スム）」と呼ばれた。

社会学者達は、面接調査が主である。彼らは、各戸を巡り、儀礼、集会には必ず顔を出し、寺に通う。ある者は、近隣村を回り、町の市場や役所に出掛ける。三脚を立て測量する者もいる。食事をのぞき、水がめを数え、井戸水を採取する。農学者達は、村人と同じく朝に家を出、野良で昼食と昼寝をし、夕べに水牛の尻について村に戻る。あるときには、ドンデーン村の祖先村を他県に訪ね、また、離村した村民が向かった開拓村を訪れた。

われわれの村への順応、村人のわれわれの受け入れには、ともに大きな問題はなかったと思っている。その理由のひとつとして、17 年前に滞在した水野氏に対する親近感が残っていたことをまず挙げねばならない。この点でも、同氏に対するわれわれの負債は大きい。第二には、ラーオ系タイ語を話すタイ人だけを選んで助手としたことである。これは、彼らが村人と調査者とのよき仲介者となり、両者間の距離感を縮める効果をもった点において、また、お上の調査という感じを取り除いてくれた点で成功であった。。

とはいえ、今回調査における調査者と村人との関係が、単独調査者の場合と根本的に異なるのは当然のことである。しかし、多人数であることが障害となっている感をもつことはなかった。かえって、

単独調査者の場合にありうべき弊害を薄める効果があったと思われる。というのは、さまざまなパーソナリティーをもち、年齢の中のある調査者達が、同じくパーソナリティーを異とし、年齢をたがえる村人達に生活のさまざまな面で接触したことによって、村人達と調査者達の上に複数の付き合いのルートが形成され、それらを通して多様な情報が両方向に行き交うといった状況が生じたからである。このような状況下で、事実の誤認、見落としが未然に防がれやすくなっただけではなく、ひとりよがりな判断をする危険性もより少なくて済んだと考える。

本特集号におけるタイ語のカタカナ表示は、以下の方針によった。
(イ) タイ字綴りよりも現地の発音を重視する。(ロ) 不自然でない限り長音、撥音を省略する。(ハ) 音節の最後にくる ng 音は、「ン_g」とすることを原則とするが、調査村の名であるดอน_g (ドン_gデーン_g) と、メコン河など慣用化しているものに限って「ン」とする。

また、いくつかの論文で使用するタイラーオ語の原語表記については、下記に従った。

ドンデーン村に関する水野氏の業績は、『タイ農村の社会組織』東京；創文社、1981. に主としてまとめられている。今回調査の部分的報告としてすでに公表されているものの一覧を以下に紹介しておく。

Fukui, H.; Kaida, Y.; and Kuchiba, M., eds. 1983. An Interim Report/ A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand. Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

- Fukui, H.; Kaida, Y.; and Kuchiba, M., eds. 1985. The Second Interim Report/ A Rice-Growing Village Revisited: An Integrated Study of Rural Development in Northeast Thailand. Kyoto: The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- 林 行夫. 1984. 「モーナムと『呪術的仏教』——東北タイ・ドンデーン村におけるクン・プラナム信仰を中心に——」『アジア経済』25(10): 77-98.
- 林 行夫. 1984. 「東北タイ農村ドンデーンにおける寺院組織、儀礼と世界観」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』23: 58-74.
- 林 行夫. 1984. 「タイの農村生活と宗教——東北タイの一稲作村を中心に——」『国際農林業協力』7(2): 95-100.
- 口羽 益生; 武邑 尚彦. 1983. 「『屋敷地共住集団』再考——東北タイ・ドンデーン村の追跡調査(中間報告)」『東南アジア研究』21(3): 288-308.
- 口羽 益生. 1983. 「東北タイ・ドンデーン村の歴史と村落組織にかんする口述資料」『龍谷大学論集』422: 59-78.
- 宮崎 猛. 1984. 「東北タイ農村における農地貸借と農業共同経営に関する経済分析」『アジア経済』25(11): 46-60.
- 宮崎 猛. 1985. 「親子農業共同経営と相互扶助的刈分小作に関する比較研究——東北タイ・ドンデーン集落における家族周期の分析」『農林業問題研究』79: 18-25.
- 野間 晴雄. 1982. 「東北タイ農村の食生活と食事文化」『奈良大学紀要』11: 57-91.
- 野間 晴雄. 1984. 「ドンデーン村小学生の夢と現実」『近江路』31: 11-19.
- バコン・クナルク(林 行夫訳). 1983. 「バコン・クナルク氏のフィールドノート」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』21: 1-27.
- 武邑 尚彦. 1983. 「東北タイ農村の家族周期」『滋賀県立短期大学学術雑誌』24: 91-100.

以上の刊行物とは別に、謄写刷りの「DDニューズレター」を発行した。現在、22号を数える。これは、本調査のメンバー間の連絡を密にし、萌芽状態のアイデアを交換して、名実ともに「総合的」であるような研究を目指す一助として行なっているものである。

1985年 9月